

## 現代中国語品詞名の確立過程における日本語の影響

——顔恵慶（1908）『英華大辞典』を例として<sup>1</sup>

楊 馳<sup>2</sup>

**要旨：**本稿は文献調査法を用い、初期の英華辞典における中国語品詞名の使用および翻訳の実態を考察するものである。とりわけ、「名詞(noun/term)」「動詞(verb)」「形容詞(adjective)」「副詞(adverb)」の四項目に注目し、これらの術語が初期の中国語文法書および英華辞典においていかなる形で使用されていたかを分析する。さらに、顔恵慶編『英華大辞典』（1908）と、神田乃武等による『新訳英和辞典』（1902）における同項目の語釈を対照し、前者が後者の術語をいかに参照・借用したかを明らかにする。現代中国語の詞類術語の確立過程においては、『中等国文典』など初期の中国語文法書に加え、『英華大辞典』（1908）もまた極めて重要な役割を果たした。同辞典は英語学知識とともに日本語由来の漢字語を積極的に取り入れ、現代中国語における品詞術語の整備、ひいては語彙学関連の術語体系の形成にも大きな資源的貢献をなしたといえる。

**キーワード：**中国語品詞名、顔恵慶、『英華大辞典』、『新訳英和辞典』

### 一、漢語詞類術語における「字」から「詞」への転換

いかなる言語においても、文法学・語彙学の構築は、厳密に定義され明確に概念化された術語体系を基礎とする。語彙学的術語の系譜を遡及し、その生成および変遷の経緯を明らかにすることは、中国語文法学および語彙学史の研究において不可欠の作業である。

中国近代以前の語法・文法研究書においては、詞類の命名に際し、「実字」「虚字」「名字」「動字」など「字」を単位とする呼称が一般的であった。これに対し、現代中国語における「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」といった品詞名がいかなる時期に出現し、いかにして定型化されたのか——これらの問題を通時的に整理することは、漢語詞類学および語彙学史研究上、極めて重要な意義を有する。<sup>3</sup>

---

<sup>1</sup> 本稿は、中国国家社会科学基金重大项目「中西交流背景下漢語詞彙學的構建與理論創新研究」（項目番号：21&ZD310）、教育部人文社会科学研究青年基金項目「語言接觸視角下近代中日新動詞生成演變與交流研究」（項目番号：22YJC740090）による成果の一部を含んでいる。

<sup>2</sup> 中国西南交通大学外国語学部講師。連絡先：yangchi@swjtu.edu.cn

<sup>3</sup> 「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」などの品詞術語は、多くの場合、漢語文法を記述する著作に見られる。しかし、初期の漢語を対象とした言語研究書には語彙学的内容も多く含まれており、両者は互いに関連し合っていて明確に区別することは難しい。本稿は、漢語における品詞術語の起源を考

19世紀中葉以前に成立した中国語研究書では、英語の part of speech にあたる概念を論じる際にも、「詞」ではなく「字」の語が用いられていた。例えば、1840年前後に畢華珍が著した『衍緒草堂筆記』では、中国語を「実字」「虚字」の二大類に分け、さらに虚字を「呆虚字」「活虚字」「口気語助虚字」「空活虚字」の四種に細分している。<sup>4</sup>また、米国人宣教師タールトン・ペリー・クローフォード (Tarleton Perry Crawford, 1821–1902、中国語名:高第丕) と張儒珍 (1841–1900) による『文学書官話』(1869) は、全21章のうち第1章を音論、第2章を文字論とし、第3章以降で「名頭 (nouns)」「替名 (pronouns)」「指名 (demonstratives)」「形容言 (adjectives)」「数目言 (numerals)」「分品言 (classifiers)」「加重言 (intensitives)」「靠托言 (verbs)」「帮助言 (auxiliaries)」「随从言 (adverbs)」「折服言 (negatives)」、接連言 (conjunctions)」「示処言 (prepositions)」「問語言 (interrogatives)」「語助言 (interjections)」など15類に区分して中国語を体系的に記述している。

近代中国語文法の嚆矢とされる馬建忠の『馬氏文通』(1898)では、「名字」「動字」「状字」「介字」などの用語を用いて品詞を区分しているが、その中心は依然として「字」であった。<sup>5</sup>これに対し、馬相伯・馬建忠兄弟がイタリア人学者アンジェロ・ゾットリ (Angelo Zottoli, 1826–1902) の『拉丁詞芸』をもとに編訳した『拉丁文通』では、「名称詞」「代名詞」「生動詞」「兼動詞」「方貌詞」「先名詞」「承転詞」「感嘆詞」など、初めて「詞」を用いた分類がみられる。<sup>6</sup>これはラテン語文法の影響を受けたものと考えられるが、同書は『馬氏文通』より後に成立し、主として震旦学院の教材として用いられたため、その影響力の範囲についてはなお断定しがたい。

章士釗の『中等国文典』(1907)は、第一章の「総略」を除き、「名詞」「代名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「介詞」「接続詞」「助詞」の八章に分けて語法を論じている。また、「字」と「詞」の区別について、「泛論之則爲字、而以文法規定之則爲詞、此字與詞之區別也」(広く論ずれば字と爲し、文法により定義すれば詞と爲す。これ字と詞の区別なり)と明確に述べてい

---

証することを目的とするものであり、それらが語彙学に属するのか、あるいは文法学に属するのかといった範疇的な問題について深入りする意図はない。

<sup>4</sup> 何群雄 (2000) 『中国語文法学事始: 『馬氏文通』にいたるまでの在華宣教師の著書を中心に』、三元社; 内田慶市 (2005) 「『馬氏文通』以前中国人的語法研究——關於畢華珍《衍緒草堂筆記》的詞類方法」『関西大学中国文学会紀要』第26号などを参照。

<sup>5</sup> 馬建忠 (2010) 『馬氏文通』、北京: 商務印書館。

<sup>6</sup> 方豪 (1967:26–27) および朱維錚 (1996:1319) は、『ラテン文通』の成書年代を1903年と考えている。一方、鄒振環 (2005:116) は馬相伯の「叙言」に記された完成時期の記述に基づき、1905年に成立したと推定している。詳しくは、方豪 (1967) 「ラテン文伝入中国考」『方豪六十自定稿 上・下・補編』、台北: 台湾学生書局、朱維錚主編 (1996) 『馬相伯集』附録「馬相伯著訳目録」、上海: 復旦大学出版社、および鄒振環 (2005) 「馬相伯与『拉丁文通』」『復旦学報 (社会科学版)』第6期、pp.112–119を参照。

る。<sup>7</sup> 郭双林 (2000) は、近代中国語文法体系の安定化と詞類名称の確定は、この『中等国文典』において成し遂げられたと指摘している。<sup>8</sup> 『中等国文典』の序例によれば、本書は章士釗が日本滞在中（東京での入院期間）に編纂したものであり、同書の詞類命名は『馬氏文通』とは異なり、日本語の影響を強く受けていると考えられる。海曉芳 (2011) は、英語文典の日本語訳、日本語文法書、および日本の漢文文典を詳細に検討し、この推定を裏付けるとともに、中国語術語が日本語の影響を受けた経路は「章士釗一人の著作を介するものにとどまらず、他の複数の経路が想定される」と指摘している（海曉芳 2011: 321）。その後、陳承澤 (1922) 『国文法草創』、黎錦熙 (1924) 『新著国語文法』なども、『中等国文典』における術語体系を基本的に継承した。

このように、漢語詞類術語が「字」から「詞」へと転換した過程は、漢語文法・語彙研究が、従来の字を中心とした訓詁学的枠組みから、近代言語学理論に基づく体系的な研究へと移行したことを端的に示すものである。しかも、近代言語学における詞類術語の概念自体が西洋語学に由来する以上、これまでの研究が主に文法書に焦点を当ててきたのに対し、19世紀から20世紀にかけて刊行された英華辞典類の資料を検討する必要がある。

本稿は、文献調査の手法を用い、現代中国語の詞類術語形成過程における日本語の影響を実証的に検討するものである。具体的には、「名詞」(noun/term)、「動詞」(verb)、「形容詞」(adjective)、「副詞」(adverb)を対象とし、英華辞典における収録および対訳の状況を分析する。特に、顔惠慶 (1908) 『英華大辞典』と、その編纂過程で参照された神田乃武等 (1902) 『新訳英和辞典』の語釈を比較し、両者の関係を明らかにする。共時的・通時的視点を併せた考察を通じて、現代中国語の語彙・文法体系の構築における詞類術語の形成過程を描出し、その過程において日本語が果たした媒介的役割を解明することを目的とする。

## 二、英華辞典における詞類術語の収録とその変遷

辞典は語彙の歴史的発展および同時代における社会的受容度を如実に反映する一次資料として、語史研究において欠くことのできない存在である。とりわけ新語・新概念を対象とする場合、双語辞典が果たす役割の重要性は言を俟たない。

本研究では、台湾中央研究院近代史研究所が公開する「英華字典資料庫」<sup>9</sup>を用い、「詞」「語」「単字」「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」など、語彙学関連の22項目に関する術語の収録状況を検索・整理した。その概要を以下に示す。

<sup>7</sup> 章士釗 (1907) 『中等国文典』第一章總略, p.1.

<sup>8</sup> 郭双林 (2000) 「章士釗与中国近代文法体系」『中州学刊』3月第2期 (総第116期)。pp.132-135.

<sup>9</sup> <https://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>, 最終確認日付: 2025年11月6日

表1 英華字典資料群に収録した語彙学関連の術語、その一

	詞	語	単語	字	名詞	代名詞	動詞	形容詞	副詞	感嘆詞	介詞
初出辞書	1819-20 馬禮遜	1819-20 馬禮遜	/	1819-20 馬禮遜	1908 顔惠慶	1916 赫美玲	1908 顔惠慶	1908 顔惠慶	1908 顔惠慶	1908 顔惠慶	/

表2 英華字典資料群に収録した語彙学関連の術語、その二

連詞	助詞	詞組	慣用語	習語	語素	詞類	術語	基本詞/基本詞彙	詞綴	詞頭/詞尾
1916 赫美玲	1844 衛三畏 <sup>10</sup>	/	1908 顔惠慶	1908 顔惠慶	/	/	1908 顔惠慶	/	/	/

「詞」「語」「字」といった基本概念は、すでにモリソン (Robert Morrison、1782-1834、中国語名：馬禮遜) による『五車韻府』(1822) においても登場しているが、ここで注意すべきは、同書における「詞」の語義が To express the inward thoughts; to speak; speech; a term, phrase, or expression; written phraseology; style; to request; to announce to; to accuse と説明されており、「言語表現」「言辞」といった語用的側面に重点が置かれ、「語」(word) の意味では用いられていない点である。すなわち、19世紀から20世紀初頭にかけて、英語における語彙学関連の術語に対応する中国語訳語は、全体として体系的に整備されていなかったのである。

現存する資料上、「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「感嘆詞」といった詞類術語が初めてまとまって登場するのは、1908年刊の顔惠慶主編『英華大辞典』である。同書にはこれらの品詞名のほか、「慣用語」「習語」「術語」など、今日一般的に用いられる語彙学用語の多くも初出している。

他方、英語側の Noun、Term、Verb、Adjective、Adverb の五項目についても、上記データベース収録の各種英華辞典に加え、収録対象外の重要辞典——たとえば譚達軒(1897)『華英字典彙集』、莫若濂『達辞』(1898)、馮鏡如(1899)『新增華英字典』、および米国宣教師マティア

<sup>10</sup> サミュエル・ウィリアムズの『華英韻府歴階』においては、「adverb (副詞)」の項目の下で「語助詞」という形で登場している。また、ロバート・モリソン以降の伝教士であるロバート・ダンロップ(羅存徳)が編纂した1866~1869年刊の英華辞典においては、「Auxiliar」「Auxiliary」の項目で「auxiliary words, expressions or euphonic particles used for interpunction and other grammatical forms (語助詞、助語詞)」と説明されている。

ー (A. H. Mateer, 1850–1936、中国語名：文愛徳) による *New Terms for New Ideas* (1913) —— を含めて検討を行った。以下では、これら主要辞典における五術語の収録および語釈の変遷を概観する。

### Noun

Noun の訳語は最も早く 1844 年、サミュエル・ウィリアムズ (S. Wells Williams, 1812-1884、中国語名：衛三畏) の『英華韻府歴階』に「実字」「死字」として現れる。1847-48 年刊のウォルター・ヘンリー・メドハースト (W. H. Medhurst, 1796-1857、中国語名：麦都思) 『英華字典』では「物名」とされ、1866-69 年刊ロブシャイト (Wilhelm Lobscheid, 1822—1893、中国語名：羅存徳) 『英華字典』では「名」「名字」とされている (1884 年井上哲次郎『訂増英華字典』では「実字」を補う)。1872 年ユストゥス・ドゥリトル (Justus Doolittle, 1824—1880、中国語名：盧公明) の『英華萃林韻府』も「実字・死字」と同義に扱い、1897 年譚達軒『華英字典彙集』では「物名」、1898 年莫若濂『達辞』では「実字 (人物地方名目)」、1899 年鄭其照『華英字典集成』では「実字 (人物地方名目)」、同年馮鏡如『新增英華字典』では「名」「名字」「実字」とされる。すなわち、19 世紀の英華辞典において Noun は一貫して「字」または「名」として理解されていたことがわかる。これに対し、20 世紀初頭の『英華大辞典』(1908) において初めて「名詞」という訳語が現れ、次のように定義されている。

*The name of anything, whether material or immaterial, abstract or concrete, real or imaginary.* (文)名詞, 名字, 名物字

1913 年の商務印書館『英華新字典』では再び「名」「名字」「実字」とされるが、同年の *New Terms for New Ideas* では「名目字」「名物字」と訳され、1916 年ヘメルン (Karl Ernst Georg Hemeling, 1878—1925、中国語名：赫美玲) 『官話』では「名詞」「名字」「名物字」が併用されている。さらに派生形として Abstract noun に「虚総名詞 (新)」、Proper noun に「定名詞」「定名」などが見られ、20 世紀初頭にかけて「名詞」概念の定着が進行したことが確認できる。

### Term

Term は名詞的・術語的義でのみ取り上げる。モリソン『字典』(1822) にすでに登場し、「To term or name 名之」「A term or particular name or expression 名字眼」とされている。1844 年ウィリアムズ『英華韻府歴階』では「名目・名字」、1847-48 年メドハースト『英華字典』では「詞」と訳され、「term, a phrase 詞」と記される。1866-69 年ロブシャイト『英華字典』も「辞・詞」を用い、例えば「word, expression 辞、詞」、「terms of arts 藝之詞」などの表記がある。1872 年盧公明『英華萃林韻府』も「名目・名字」と同義に扱う。1897 年譚達軒『華英字典彙集』では「word 字句」「to call 称名」、1898 年莫若濂『達辞』では「名目、字句」「legal terms 律例之語」と記される。1899 年鄭其照『華英字典集成』では「界限、期、節令、字、情形、議価之事」、また動詞義では「term to 以名命之」としている。1899 年馮鏡如『新增英華字典』はロブ

シャイトと同様に「辞、詞、字眼」「藝之詞」とし、1908年『英華大辞典』ではさらに精緻化され、「名辞」という新たな訳語を導入している。

*(Logic) The subject or the predicate of a proposition, (論)名, 名辞; ... as, the major term, 大名辞, 大端; the minor term, 小名辞, 小端; positive term, 正名; negative term, 負名*

*A word or expression, 辞, 詞, 語, 言, 字眼; as, a technical term, 専門学之名辞, 専門語*

1913年の商務印書館『英華新字典』では「限、界、限期、定時、辞、詞、名、条約」となり、動詞義では「名、称、叫」。同年の *New Terms for New Ideas* では書名に用いられている「new terms」自体が「新名詞」と印刷されており、1916年『官話』では“name 名詞(辞)(新)、名目”、“Modern terms 新名詞(新)”、“Technical terms 専門名詞(新)、術語(新)”などの用例が急増している。特に複合的語義では「定称之名」「歧義之名」などの表現が見られ、名辞体系の整備過程がうかがえる。

### Verb

モリソン『字典』(1822-23)以来、*verb* は一貫して「生字」「動字」「活字」として命名されてきた。ウィリアムズ『英華韻府階階』(1844)、メドハースト『英華字典』(1847-48)、ロブシャイド『英華字典』(1866-69)、ドゥリトル『英華萃林韻府』(1872)においても、いずれも「活字」「生字」「動字」とされる。1897年譚達軒『華英字典彙集』では初めて「虚字」という表現が加わり、「活字・虚字」と併記された。1898年莫若濂『達辞』は「活字・生字」、1899年鄭其照『華英字典集成』では「活字・生動字」、同年馮鏡如『新增英華字典』では「活字・動字・生字」とされる。1908年『英華大辞典』では「動字」「活字」「語詞」「云謂字」と説明され、未だ「動詞」や「述語(謂語)」は見られない。

*(Gram.) The part of speech that asserts something of something else, or what a thing is, does, or has done to it, and is used interrogatively and imperatively as well as indicatively, (文)動字, 活字, 語詞, 云謂字*

1911年ヴィルヘルム『徳英華文科学字典』は「動字」、1913年商務印書館『英華新字典』では「謂字・動字」、1913年 *New Terms for New Ideas* では「活字・云謂字」となっている。1916年赫美玲『官話』において、ようやく「動詞」が現れるが、定義部では依然として「活字」「動字」「靠托言」「云謂字」など複数の用語が併用され、用語体系が混在していたことが窺える。例えば、

<i>Active verb</i>	靈動活字(新)、力行動字(新)
<i>Finite verb</i>	有限動詞(新)
<i>Impersonal verb</i>	無位動詞(新)
<i>Intransitive verb</i>	内動字(新)、自動字(新)

<i>Passive verb</i>	受動活字（新）
<i>Reflexive verb</i>	反照動字（新）
<i>Transitive verb</i>	及物的動字（新）、他動詞

といった具合で、当時の語彙体系には未だ一定の揺れが存在した。

### Adjective

Adjective の訳語は、1866–69 年ロブシャイド『英華字典』に初出し、「勢字」とされる（1884 年井上哲次郎『訂増英華字典』も同様）。1897 年譚達軒『華英字典彙集』では、「形容之別、英國文法書用以別形容之字眼，如高低大小長短等字英話叫做 Adjectives」と詳細に説明されている。1898 年莫若濂『達辞』は「形容字」、1899 年鄭其照『華英字典集成』は「形容字・勢字」、同年馮鏡如『新增英華字典』は「勢字」とし、1908 年『英華大辞典』では「勢字・形容字」に加えて「区別字」を併記する。

1913 年商務印書館『英華新字典』では「形容字」、同年の *New Terms for New Ideas* では「定名目字・区別字」、1916 年『官話』では「勢字（新）」「形容字（新）」「静字（新）」「指美字（新）」など多様な訳語が併存している。注目すべきは、近代の英華辞典類では Adjective に対して「形容詞」という訳語が依然として出現しない点である。

### Adverb

Adverb は、最初に『英華韻府階階』（1844）に「語助詞」として登場する。ロブシャイド『英華字典』（1866–69）では「勢字」とされ、Adjective と同義に扱われている。1872 年ドゥリトル『英華萃林韻府』は再び「語助詞」、1884 年井上哲次郎『訂増英華字典』では「勢字」「語助詞」を併記する。1897 年譚達軒『華英字典彙集』は「勢字」、1898 年莫若濂『達辞』では「情形字」、1899 年馮鏡如『新增英華字典』では「勢字・語助詞」、鄭其照『華英字典集成』では「更形容字・越形容字」と説明される。1908 年『英華大辞典』は「（文）疎状字・状字・勢字」とする。1913 年商務印書館『英華新字典』は「状字・疎状字」を継承し、*New Terms for New Ideas*（1913）では「動活字・疎状字」、1916 年『官話』では「疎状字（新）」「状字（新）」「隨從字（新）」「勢字（新）」とされる。これらの資料から、19 世紀後半の英華辞典においては Adjective と Adverb の訳語がいずれも「勢字」として共通しており、両者が明確に区別されていなかったことがわかる。

以上の検討から、初期英華辞典における語彙学術語の収録状況を概観することができた。20 世紀初頭の時点で、中国語の語彙学・文法学体系は依然として形成途上にあり、術語の整備も十分とは言い難かった。したがって、現代中国語における「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」は、当時まだ英語の Noun、Term、Verb、Adjective、Adverb と確立した一対一の対応関係を結んでいなかったといえよう。しかしながら、表 1 に示した通り、これらの漢語詞類術語はすでに『英華大辞典』（1908）において登場しており、次節では、この五項目の術語が同辞典および関連資料の中でどのように用いられているかを、より詳細に検討することとする。

### 三、『英華大辞典』(1908)と『新訳英和辞典』(1902)における品詞名の比較

1908年、顔惠慶等によって編纂された『英華大辞典』は、中国で初めて「辞典」の語を冠した英華辞書である。本辞典は英漢双解の形式を採用しており、これは辞典そのものが外国の辞書を翻訳したものであると同時に、当時の辞書が中国人の英語学習と外国人の中国語学習の双方を目的としていたためである。

顔惠慶は「自序」「編輯部序(英文)」「例言八則」などにおいて、本辞典の編纂経緯を繰り返し説明している。すなわち、『華英音韻字典集成』(1902)の出版が大きな成功を収めた後、商務方面ではさらに大規模な英漢辞典を編纂したいという意向が生じた。当時、新語・術語が次々と出現していたにもかかわらず、それらに対応できる参考書はほとんど存在しなかった。そこで、1905年夏以降、顔惠慶は編纂作業を組織し、香港仁仁書院および上海聖ヨハネ大学の教授らが主要な執筆を担当した。当初は『ウェブスター英語大辞典』(*Webster's Dictionary*)の全訳を試みたが、試訳数頁の段階でその困難が明らかとなり、代わってナトール(Nuttall, P. Austin, 1792?-1869)の *Nuttall's Standard Dictionary of the English Language* を底本として採用した。さらに、『華英音韻字典集成』から多くの優れた例文を抜粋し、語彙の選択・釈義の体例などについてはウェブスター辞典を参照したとされる。

また、英語辞典以外の参照文献について、「例言」には次のような記述がある「是編採用諸書、暨所参考、不下数十百種。有為中国教育会者、有為江南製造局本者、有為嚴氏所著本者、有為英和字典本者」(本編は諸書を採用し、参考と為すところ、数十百種に下らず。中には中国教育会の編述になるものあり、江南製造局の刊本あり、嚴氏の著作本あり、また英和字典の類を本とするものあり)。すなわち、英和辞典の参照も含まれていたことが明記されている。沈国威、陳力衛らの研究によれば、ここで指す英和辞典とは、主として神田乃武等による『新訳英和辞典』(1902)を指すと考えられている。同辞典は神田乃武・横井時敬・高楠順次郎・藤岡市助・有賀長雄・平山信らによる共同編著であり、明治35年(1902年)に刊行された。訳語の分担は、横井時敬が農学、藤岡市助が電気学、有賀長雄が法律・政治・経済・外交・哲学・心理・教育・美術、平山信が天文学をそれぞれ担当している。<sup>11</sup>

日本語では、すでに19世紀初期の蘭学系文献『蘭語九品集』『訂正蘭語九品集』などにおいて、品詞を表すために「詞」の字を用いていたことが知られている。例えば「発声詞・静詞・代名詞・動詞・動静詞・行動詞・連属詞・所在詞・嘆息詞」などの区分が見られる。<sup>12</sup>『新訳英和辞典』では、Noun、Verb、Aadjective、Adverbをそれぞれ「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」として訳出しており、すでに今日とほぼ同様の体系が成立していた。

以下では、『英華大辞典』における「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」の四項目を対象に、それぞれの使用状況と特徴を具体的に検討する。

<sup>11</sup> 三省堂ホームページに参照 <https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/ayumi11>

<sup>12</sup> 松村明、古田東朔(2000)『蘭語九品集 附訂正蘭語九品集』(近世蘭語学資料第IV期 和蘭文法書集成 第三巻)、東京：ゆまに書房。

調査の結果、「名詞」は25項目において25例、「動詞」は11項目で12例、「形容詞」は2項目で2例、「副詞」は1項目で1例の用例が確認された。

表3 『英華大辞典』と『新訳英和辞典』における「名詞」の用例（一部抜粋）

見出し語	英華大辞典	新訳英和辞典
Abstract	Abstract terms, those which express abstract ideas, as beauty, whiteness, without regard to any subject in which they exist, 意想之名詞, 通名, 事物色相之名詞, 抽象名辭(即如不言其所附麗之物徒言美麗白色是也) or the names of orders, genera, or species of things, 或物類物種之名目是也;	(文) 無形名詞. p.6
Antecedent	(Gram.) The noun to which a relative refers, (文)先行名詞, 前名	(文) 先辭, 先行名詞 p.41
Medium	(Logic) The mean or middle term of a syllogism, (論理)中名詞	(論) 中名辭 p.612
Noun	The name of anything, whether material or immaterial, abstract or concrete, real or imaginary, (文)名詞, 名字, 名物字; as, a common Noun, 公名; a proper Noun, 本名; a collective Noun, 類名	(文)名詞 p.661
Substantival	Of or pertaining to a substantive, 實名詞的, 名物字的; of the nature of a substantive, 有實名詞之性質的	實名詞ノ, 實名詞上ノ p.972
Substantive	(Gram.) A noun, (文法)名物字, 實字, 實名詞, 名詞	(文)實名詞 p.973
Substantively	(Gram.) As a substantive name, or noun, (文法)如實名詞然, 如物名字然	(文)實名詞トシテ, 實名詞状ニ. p.973
Verbal	(Gram.) Derived from a verb, (文)動詞的, 自動字得, 云謂字的; as, a Verbal noun, 自動字轉成之名字, 動詞根名詞	Verbal noun. (文)動詞根名詞. p.1081

上表以外にも、『英華大辞典』における「名詞」の用例は、英語 name や term に対応する語として多く見られる。例えば、

*Centuary* : The name of various plants, 植物名詞

*Special* : as, a special dictionary of commercial terms, 商業名詞之専門字典

また、name は『英華大辞典』で「A noun, (文)實字, 名物字」とされ、term は「(Logic) The subject or the predicate of a proposition, (論)名, 名辭」と積されている。これに対し、『新訳英和辞典』ではそれぞれ「(文)名詞」(p.646)、「(論)名辭」(p.1005)とされており、両辞典において語積の対応関係が極めて近似していることがわかる。

同様に、「動詞」についても、両辞典における用例および訳語の対応関係は一致しており、その後の中国語文法用語の定着に一定の影響を及ぼしたものと考えられる。

表4 『英華大辞典』と『新訳英和辞典』における「動詞」の使用（一部抜粋）

見出し語	英華大辞典	新訳英和辞典
Deponent	A deponent verb, one which has a passive termination with an active signification, (拉丁文) 有受動之形而含發動意義之動詞	(文) 受動形ニシテ発動ノ意ヲ有スル動詞 p.271
Intransitive	as, an Intransitive verb, (文) 不及物之云謂事, 自動詞	Intransitive verb 自動詞 p.533
Mood	A variation of form in a verb to express the manner in which the action or fact denoted by the verb is conceived in connection with the subject, (文) 活字之用法, 動詞之方式, 語氣, 情	(文) 法「動詞ノ」 p.634
Neuter	(Gram.) A neuter noun, (文) 罔兩之名物字; a neuter verb, 自動詞	(文)(a) 中性名詞; (b) 中性動詞, 自動詞 p.653
Verbal	(Gram.) Derived from a verb, (文) 動詞的, 自動字得, 云謂字的; as, a verbal noun, 自動字轉成之名字, 動詞根名詞	動詞的. Verbal noun. (文) 動詞根名詞 p.1081
Voice	(Gram.) .....the active voice, 施事之剛聲, 能動態, 能動詞; the passive voice, 受事之柔聲, 所動態, 自動詞	Active voice (文) 能動態, 能動辭; middle voice (文) 兩動態, 兩動辭; passive voice (文) 所動態, 所動辭 p.1090

他の語彙項目の釈義において、verb に対応する訳語は通常「動字」ではなく「動詞」となっている。また、「transitive verb」は他の項目では「他動詞」として訳されている。

*Object* : That which follows as acted upon by a transitive verb. (文) 在他動詞之後者, 受事者, 目的格

*Will*: (Gram.) An auxiliary verb, and a sign of the future tense, admitting of different significations in the different persons, (文) 助動詞之一(指將來)

「形容詞」は *than the* の語義説明中に、「副詞」は *than* の語義説明中にそれぞれ現れるが、いずれも文法的性質を補足的に説明する文の中で用いられている。一方、『新訳英和辞典』(1902) の「*than*」および「*the*」の項にはこのような説明は見られない。

*Than* : Denoting comparison, and generally placed after a comparative adjective or adverb, 比, 更, 於(比較字常置於比較形容詞或副詞之後)

*The* : Denoting a certain person or thing, and used before adjectives in the comparative and superlative degree, 此, 其(常用於比較與尤最級形容詞之前)

これに加えて、和田垣謙三の『新英和辞典』(1901)、Frank Warrington Eastlake (1858-1905)、大森俊次等共編『英和新詞彙』(1901)、長谷川方文編『新英和辞林』(1903)、島田豊『双解英和大辞典 増訂版』(1904)、磯部清亮編『最近英和辞林』(1904)などの英和辞典も調査し

た。<sup>13</sup>これらの辞典の中には一部の訳語が『英華大辞典』と一致するものもあったが、全体的な類似度は『新訳英和辞典』（1902）よりも低かった。

以上の調査から、『英華大辞典』（1908）における品詞名の使用状況を確認することができる。すなわち、Noun、Verb、Adjective、Adverb の見出し語の訳語としては依然として「字」が用いられているが、「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」といった語も他の語義説明中に不可避免的に登場しており、その用法は底本の一つである『新訳英和辞典』（1902）の影響を明確に受けている。

#### 四、結び

1915 年の『辞源』では、「名詞」「動詞」「形容詞」「副詞」がそれぞれ独立した項目として設けられ、解説が加えられている。「動詞」「形容詞」「副詞」の釈文には英語の Verb、Adjective、Adverb が明記されている。

【名詞】字之用以名一切事物者。謂之名詞。如天地人物等是。一作名字。亦作名物字、凡一事物專有之名詞。曰固有名詞。通同類事物而用之者。曰普通名詞（《丑集》第 29 頁）；

【動詞】Verb 字之用以申說事物者。謂之動詞。如視聽言動等字是。有他動詞。自動詞。輔動詞等之別（《子集》第 349 頁）；

【形容詞】Adjective 字之用以限制名詞之意義者。如大小長短等字是。一作靜字及區別字（《寅集》第 241 頁）；

【副詞】字之用以限制除名詞代名詞外置各類詞隻意義者。謂之副詞。一作狀字。亦作疏狀字。英文作 Adverb（《子集》第 333 頁）

前述のように、その後の漢語に関する言語・文法書もいずれもこれらの術語を踏襲し、「字」ではなく「詞」を用いるようになった。下表は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての主要な漢語文法書における各品詞術語の使用状況である。<sup>14</sup>

表 5 19 世紀末から 20 世紀初期までの主要な中国語文法書籍における品詞名の使用

英語	馬氏文通 (1898)	中等國文典 (1907)	實用國語文 法 (1920)	國文法草創 (1922)	新著國語文 法 (1924)	高等國文法 (1930)
Noun	名字	名詞	名詞	名字	名詞	名詞
Verb	動字	動詞	動詞	動字	動詞	動詞
Adjective	靜字	形容詞	形容詞	象字	形容詞	形容詞
Adverb	狀字	副詞	副詞	副字	副詞	副詞

<sup>13</sup> 上記の諸辞典の選定は、2017 年 1 月 21 日に関西大学で行われた成城大学の陳力衛教授による口頭報告「顔惠慶『英華大辞典』參考了哪些英和辞典？」において挙示された辞典を参考にしたものである。

<sup>14</sup> 海曉芳（2014）『文法草創期中國人的漢語研究』p.347 表 1 により整理。

『英華大辞典』（1908）は刊行当初から再版が重ねられ、広く流通し、中国の各階層から重視された。その訳語・術語の確定は、漢語に対して無視できない影響を及ぼした。沈国威（2021）は、『英華大辞典』（1908）が漢語の近代性の形成に寄与し、自然科学・人文科学の用語名詞、ならびに動詞・形容詞などの二字述語を多く提供したと指摘している。<sup>15</sup>現代漢語における品詞名の確立過程において、『中等国文典』などの初期漢語文法書に加え、『英華大辞典』（1908）も極めて重要な役割を果たした。すなわち、同辞典は英語の知識と日本語の漢字語を媒介し、現代漢語の品詞術語、さらには語彙学上の諸術語の整備にまで豊かな資源を提供したのである。

#### 参考文献

- [1]. 内田慶市（2005）「《馬氏文通》以前中国人的語法研究——關於畢華珍《衍緒草堂筆記》的詞類方法」『関西大学中国文学会紀要』第26号、23-34頁
- [2]. 何群雄（2000）『中国語文法學事始：『馬氏文通』にいたるまでの在華宣教師の著書を中心に』、三元社
- [3]. 海曉芳（2011）「漢語語法研究中的詞類劃分及術語演變問題」『東アジア文化交渉研究』第4期、309-325頁
- [4]. 海曉芳（2014）『文法草創期中國人的漢語研究』、北京：商務印書館
- [5]. 郭玉紅（2017）『顏惠慶與《英華大辭典》的編纂研究』北京外國語大學修士論文
- [6]. 郭双林（2000）「章士釗與中國近代文法體系」『中州學刊』第2期、132-135頁
- [7]. 神田乃武等（1902）『新訳英和辞典』、三省堂
- [8]. 顏惠慶著、吳建雍等訳（2003）『顏惠慶自伝——一位民國元老の歴史記憶』、北京：商務印書館
- [9]. 邵敬敏（2010）『漢語語法學史稿（修訂本）』、北京：商務印書館
- [10]. 章士釗（1907）『中等国文典』、上海：商務印書館
- [11]. 沈国威（2011）『近代英華英字典解題』、関西大学出版社
- [12]. 沈国威（2019）『漢語近代二字詞研究——語言接觸與漢語的近代演化』、上海：華東師範大學出版社
- [13]. 沈国威（2022）「中国語の近代性と『英華大辞典』（1908）」関西大学東西学術研究所編『東西学術研究所成立70周年記念論文集』、195-210頁
- [14]. 鄒振環（2005）「馬相伯與《拉丁文通》」『復旦學報(社會科學版)』第6期、122-129頁
- [15]. 陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播:漢語を媒介に』、三省堂
- [16]. 馬建忠（2010）『馬氏文通』、北京：商務印書館
- [17]. 松村明、古田東朔（2000）『蘭語九品集 附訂正蘭語九品集』（近世蘭語学資料第IV期 和蘭文法書集成 第三卷）、ゆまに書房
- [18]. 陸爾奎（1915）『辞源』、上海：商務印書館
- [19]. データベース：<https://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>

<sup>15</sup> 沈国威：「『英華大辞典』（1908）と中国語の現代性」、2021年10月31日関西大学東西学術研究所創立70周年記念シンポジウムにおける報告。